

## 「本質観取」を私の日本語教育の 実践と研究に、どのように取り入 れたか

稲垣 みどり

早稲田大学国際教養学部

2018年7月1日（日）批判的言語教育国際シンポジウム

©武蔵野大学 有明キャンパス

### 1. 研究の内容－問題設定

研究課題：「複言語育児」を実践する親たちの意味世界  
－共通了解の成立を目指す日本語教育の提言－

（背景）

- ・アイルランドで子どもを育てる日本人の親（国際結婚、現地永住）
- ・「補習校」に在籍するも、日本帰国予定の駐在員子女とは「日本語」学習のニーズが違う。→自分たちで新しい「学校」を設立。
- ・新しい「学校」でどのようなカリキュラムを作るのか。



言語教育の「理念」（「意味」と「価値」）をめぐる信念対立

### 2. 研究の方法

- ・一人一人の親の、子どもに対する日本語教育の意味づけを  
**ライフストーリー**インタビューで聞く。



「複言語育児」を実践する親の「意味世界」を描く

13人の親に計30回インタビュー。論文では3人の親の語りを取り上げる。

### 3. 現象学に出会う前の私①

- ・アイルランドで成長する子どもの日本語学習の意味づけについて、アイルランド在住の日本人の親や日系の青少年にインタビューを重ねていた。
- ・そもそもそれらの「人の語り」を聞くこと、「語り」のデータを基に、そこから何かの意味を掴み出すこと。そのことの裏にはどんな世界の見方があるのか、理解していなかった。



研究課題に対する研究方法としてライフストーリー法を取り入れるも、それが目指すものを自分でよくわかっていなかった。

### 現象学に出会う前の私②

- ・自分の研究課題を解く理論が見つからなくて苦しみ  
「継承日本語教育」「移動する子ども」  
「バターナリズム」「ライフストーリー」etc



【複言語育児】の分析概念を立てて、親の日本語をめぐる育児の意味世界を描くことを発想。

- ・言語実践としての育児
- ・社会実践としての育児

### 現象学と出会う前の私③

個別の親の「意味世界」を知ってどうするの？  
1人1人、意味世界は多様で個別。その「在りよう」を提示することが「本研究の目的」になってしまうのか？  
「みんな違ってみんないい」のはてしない相対主義でいいのか

一方ではいつも、アイルランドの「新しい学校」のカリキュラム構築はどうするのか？という問い。



現地調査として現地によく足を運び、アドバイザー的な立場で新補習校に関わっていた。

#### 4. 現象学と出会った後の私

質的研究の理論の底板、それを支える認識の学＝  
哲学原理としての現象学の理論的枠組みを知る。  
特に「**共通理解の成立**」を**目**がける「**本質観取**」の  
**原理**で、言語教育の意味と価値をめぐる私の研究課題  
は解ける！と気づく。



自分の研究における「ライフストーリー」の意味を得心

#### 5. 現象学の文脈化①：研究方法として

現象学は、自己体験も振り返りから、「生きられた経験」を言葉に  
して取り出す質的研究法の理論的な基盤を支える原理である。

例) 私が研究課題で明らかにしたかったこと

親たちが自らの異文化間移動の経験と異言語習得の経験を  
どのように捉え、自らの複言語育児を実践しているのか



異文化と異言語間を移動する「移動する親」の**実存的**  
**な意味付けを主観的な意味世界として明らかにすること**

#### ライフストーリーの分析に「本質観取」

▶ 「複言語育児」を実践する親の目指す言葉の力  
3人の親のライフストーリーから、移動する親が「複言語育  
児」において目指す言葉の力の3人に共通する普遍的な本質  
として、次の3つの力を「本質観取」した。

- ①複言語複文化能力を駆使して発揮する、どこでも生きていける力
- ②自分とは異なる価値観をもった他者を認め、共生していける力
- ③国際社会の中で自分を発信していける力

・個別の親の「複言語育児」をめぐる意味付け、価値づけに  
普遍性は見いだせるのか。

「共通理解」は成立し得るのか？

**本質観取**

もしも「共通理解」が成立するのなら、それが「新しい学校」  
の言語教育の理念になり得るのではないか？  
→「本質観取」による共通理解の成立

#### 6. 現象学の文脈化②ワークショップ実践

・ワークショップの実践

アイルランドで親を対象に「本質観取」ワークショップ実施  
テーマ：「複言語育児」において目指す言葉の力

- 1回目 2017年9月  
パイロット調査：3人の親を対象に実施。
- 2回目 2018年5月  
親、9名に実施。

#### 7. まとめ

▶親たちのライフストーリーを「本質観取」して得られた  
共通理解  
→親同士の信念対立を乗り越えて共通の言語教育の理念を  
構築していく可能性



今後の課題は、これを研究の場から実践の場＝ワークショップ  
という場で、親たちの対話の場を創出し、共通理解の成立を  
目指したい。

## 参考文献

- 稲垣みどり (2016) 「『移動する女性』の『複言語性』—在アイルランドの在留邦人の母親達のライフストーリーより」『リテラシーズ』18, pp.1-17
- 川上郁雄 (2014) 「あなたはライフストーリーで何を語るのか—日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシーズ』14, pp.11-27
- 竹田青嗣 (1989) 『現象学入門』NHKブックス
- 館岡洋子 (編) (2015) 『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』コロ出版
- 三代純平 (編) (2015) 『日本語教育学としてのライフストーリー—語りを読み、書くということ』くろしお出版
- ラングドリッジ, D (2016) 田中彰吾・渡辺恒夫・穂田嘉好子訳『現象学的心理学への招待 理論から具体的技法まで』新曜社
- Iwachi, S. (2016) *The Phenomenological Language Game, The Original Contract of Goodness*, Journal of Eidetic Science III, pp.1-17